

学び続ける経営者

—— 外断熱改修の新たな可能性を探って

田中 辰明

(一社)日本断熱住宅技術協会 理事長／お茶の水女子大学名誉教授

企業を経営しながら大学院で学問を究めることは、言うほど容易なことではない。日々の業務に追われる経営者にとって、研究に必要な時間を捻出するだけでも大きな試練である。その困難な道を歩み切った一人が、一般社団法人日本断熱住宅技術協会の会員としても活動する中衆司氏である。

中氏は、建物改修工事を手がける三和建装株式会社を経営するかたわら、早稲田大学大学院修士課程で学び、2026年3月に修士課程を修了した。実務の最前線に立ちながら学問の世界にも身を置き続けた姿勢は、多くの関係者から高く評価されている。

氏に取り組んだ研究の題目は、「集合住宅の外断熱改修における普及アプローチに関する研究——『断熱』と『遮熱』の両側面に着目して——」である。

近年、日本では夏の暑さが年々厳しさを増し、住宅における暑熱対策が大きな社会課題となっている。中氏は、これまで主として寒冷地の冬季対策として理解されてきた外断熱工法に着目し、その効果を夏季の居住環境改善という視点から検証した。研究では、集合住宅における住戸位置ごとの違いや、一日の時間帯による室温変動を詳細に分析し、外断熱改修がもたらす効果を定量的に明らかにしている。

特に注目されるのは、最上階住戸において顕著な改善効果が確認された点である。屋根から受ける強い日射の影響を軽減することで、室内環境の快適性が向上し、居住者の健康維持だけでなく、建物の資産価値向上にも寄与する可能性が示された。また、昼間にコンクリートへ蓄積された熱が夜間に放出されることで発生する「夜間熱中症」の



▲中衆司氏

危険性に対しても、外断熱改修が有効な対策となり得ることが確認された。

これまで外断熱は、北海道をはじめとする寒冷地で冬の暖房負荷を低減する技術として普及してきた。しかし中氏の研究は、それを単なる「断熱」の技術としてではなく、「遮熱」の技術としても捉え直し、本州以南の蒸暑地域においてこそ大きな可能性を秘めていることを示している。

エネルギー問題への対応が求められる時代にあって、建築技術は単なる省エネルギーの手段にとどまらず、人々の健康と生活の質を支える社会基盤としての役割を担う。中氏の研究は、外断熱改修がその一翼を担うことを実証的に示したものであり、今後の住宅政策や補助制度のあり方にも新たな示唆を与えるものである。

実務の現場から生まれた問いを学問の世界で深め、その成果を再び社会へ還元する——。中衆司氏の歩みは、研究とは決して大学の中だけに存在するものではなく、現実の課題に向き合う人々の営みの中から生まれるものであることを教えている。